

第4回「調和と共生のまちづくり部会」会議録

日時：平成17年1月30日（日）

午前11時～正午

場所：市役所3階301会議室

出席委員

- 1号委員 大北国栄、宮本哲
- 2号委員（各種団体）梶田忠博、谷村勇、森尾陸子
- 2号委員（公募） 岡林扶美子、木下光、高橋功、水谷邦子
- 3号委員 前中久行（部会長）、農野寛治（副部会長）

欠席委員

- 2号委員（各種団体）河原純子
- 2号委員（公募） 井上壽子

事務局

- 企画総務部企画経営室企画グループ長：土井信雄
- 企画総務部企画経営室企画グループ主査：山口麻子

㈱日本総合研究所

松岡敦子

【土井企画グループ長】

それでは、調和と共生のまちづくり部会をはじめさせていただきます。まず、出席状況でございますが、河原委員と井上委員が欠席ということでご連絡をいただいております。それでは、前中部会長、よろしくお願いたします。

【前中部会長】

皆さん、お忙しいところ、ありがとうございます。それでは、早速ですが、議事に入りたいと思います。先ほど、基本構想の素案について、事務局から説明がありました。それに基づいて、部会で審議をしていきたいと思います。序章から順次、審議をする形で進めていきたいと思います。章ごとに相互に関連をする部分もありますけれど、厳密にということではなくて、序章の方から書き起こしながらということで行きたいと思っております。時間については、意見交換については11時50分位ごろまでとして、その後、次回の日程を調整して、会議を12時頃には終了したいと思っております。よろしくお願いたします。

それでは、序章につきましては何かございましたら、お願したいと思っております。

後ろの方に、前回との変更点の一覧表もありますので、そういうことも参考にしながら

らご意見の交換をお願いいたします。それから、今までにいただいた意見を踏まえて、訂正をしたものを今回、示されておりますので、意見がちゃんと入っているかどうかということと、それからもう 1 つは、修正の過程でよくあることなのですけれども、ごくごく普通だけれども大事なことが、文章の修正上とかで、抜けてしまっていることがあります。そのようなことも含めてご覧いただきたいと。前には入っていたのに、修正文では消えてしまっていたということがありますので、そういうことも含めてお願いしたいと思いますが、ページとしては、1 ページということですが、いかがでしょうか。

【高橋委員】

言葉の問題なのですけれども、基本的な認識の問題なのですけれども、真ん中あたりに、「すなわち『右肩上がり』の終わりを迎え」となっているのですけれども、右肩上がりの終わりというのは、多分、バブルがはじけて不況が蔓延してきた、デフレスパイラルとか、そういう話だと思うのですけれども、これは、終わりというのは、平成 2 年の暮れにバブルがはじけていますよね。だから、第 3 次総合計画の前にはじけて、右肩上がりが終わっているのですよね。今頃、「終わりを迎え」という、こういう表現を書いているのはどうなのでしょうね。色々な方が読まれると思うので、ちょっと気になったのですけれども、ちょっと世の中の認識とずれているのではないかと。

【宮本委員】

関連して、私もここがちょっと今、引っかかっていたところなのですけれども。何が、「右肩あがりの終わりか」ということが曖昧になってしまっていて、何もかも右肩あがりが終わりかということ、決してそうではないはずであって、色々な面で右肩あがりをしていかなければいけないものがあるわけですから。言わんとしていることは分からなくもないのですけれども、ちょっと表現がどうかなという感じがするのです。もう少し丁寧な表現が必要なのか、こういう表現が必要か必要でないのかも含めて、検討をしていただけないかなという感じでした。

【前中部会長】

もし、具体的に何か表現をご提案いただければ、参考にさせていただきたい、あるいは、そういうようなご質問の意味を含めて、検討していただくというようなことで。

【宮本委員】

そうですね。ちょっと、今、具体的にこれに代わる言葉を思いつかないのですけれども。

【前中部会長】

これは結局、その前のところにあります、環境が変わってきたということ踏まえてということでしょうね。ありがとうございます。他にいかがでしょうか。木下委員は何かありますか。

それでは、また、あれば戻っていただいて結構ですから、「第1章 まちづくりの基本方向」の部分に審議を進めたいと思います。2ページ、3ページ、4ページと、大分長く続きますが、どの部分からでも結構です。

【梶田委員】

言葉の使い方ですが、よろしいですか。一番上の四角で囲んでいるところの文章の中で、「整理し」、「整理し」、「整理し」と、3つ入っているのですけれども、何か、3つもありましたら、どこから順番に整理するのかな、言葉の使い方としてどうかなど。

【前中部会長】

そうですね。

【梶田委員】

「可能性を整理した上」、これを使えば今度、「資源を整理し」、そして、また、「潮流に即して整理した」となっていますので。ですから、例えば、「資源を総括する」とか、あるいは、「潮流に対応した」とか、そういう他の表現の方が言葉としていいのではないかなという気がします。

それともう1つ、その次の、「本市域では早くから人々の営みが」とありますが、この「早くから」というのは、後の文面で「旧石器時代」からいきますと、古代からということになるのではないのでしょうか。「早くから」と言うと、近々の「早く」に聞こえます。ご検討願います。

【前中部会長】

ありがとうございました。この四角の部分は、「整理」が3つ出てくるということ。これは、例えば、最初の部分は「課題や可能性を認識し」というような形で、次は「まちづくりの歩みや資源を評価し」とか、そういうような。

【梶田委員】

その辺でお考えいただけたら。

【前中部会長】

ありがとうございます。いかがでしょうか。

私の方からも、4ページの上のところ、これも言葉の問題なのですが、「伝統文化も残

されており」ということですが、河内長野の場合は、伝統文化は、逆に言うと、かなり積極的な意味で活発に生きているというので、「残されている」というよりも、もう少し積極的な表現がふさわしいのではないかという気がします。

【梶田委員】

それともう1つ、すいません、4ページですけれども、「また、福祉や自然、環境美化、観光、文化財」と、このようになっていきますね。これは、福祉とどういうつながりになっているのかとふと思ったのですけれども。福祉は福祉でまとめていくとか、自然環境とか観光とかで分けるジャンルの問題ですが。福祉がなぜ、ここに入ってくるのかなという気がちょっとするのですけれども。

【前中部会長】

ボランティア活動という。

【梶田委員】

そういう意味からですかね。そうすると、ちょっと行を変えて、「熱心なボランティア活動」の前に「福祉においては」とかしてもらえば、つながるのですけれども。

【前中部会長】

ですから、ここはむしろ、「ボランティア活動や活発な生涯学習活動」を主張するのが主眼なので、文章の表現の仕方としては、「熱心なボランティア活動や活発な生涯学習活動がこういう分野で行われている」と。ちょっと前後を入れ替えるという。

【梶田委員】

前後を入れ替えていただいた方がいいような気がします。

【前中部会長】

いかがでしょうか。それから、私の方からもまた、5ページやその他のところで、「少子高齢化」と、これは色々なところで出てくる言葉なので、事実を一度確認しておいた方がいいかなと思っているのですが。確かに、生まれてくる子どもの数は少なくはなっているのだけれども、出産率とか、そういうものはどうなのか。例えば、私の住んでいる周りを見ても、結構、お子さんが次々にご誕生されているということもありますので。もし、出生率、そういうデータ等、過去と比べてどうなのでしょうね。

【谷村委員】

私の覚えている段階では、平成13年に、いわゆる少子化、14歳までの子どもの人口と

65歳の人口がちょうど一緒だったのです。今度は反対に、これが減ってきて、そういう傾向で、平成13年のときが一番いいときであろうと。お年寄りも少ないし、また、子どもも、まあ、%ですけれども、そのように記憶しているのですけれども、それ以後は。

【前中部会長】

数としては、当然逆転していると思うのです。逆に言うと、若い人達が沢山出産をしていただいているということは、それだけ環境が恵まれているという、そういういいところで積極的に評価出来ると、もし、そうであればですが。出生率自体が低下しているということであれば、少し考えていかなければいけないかと思うのですが、その辺りが、データとして、一度。出ているはずですよ。

【大北委員】

出生数は年間約千人前後が、ずっと続いているという話を、我々は聞いているのですが、その辺のところの確認を、やはり、ここに記載する以上は、河内長野市ではこういう傾向になっているということを明確にしていけないといけないだろうと、今、部会長がおっしゃったようなことだと思います。確かに、日本全体から見れば、再来年になれば、今度は人口が減少傾向になるという形というのは、既に政府が発表しているという事実があるのですが、これを河内長野バージョンにプラス、正確なものをということで、来年の中に入れていけないといけないと思いますね、今、おっしゃったように。その辺は事務局ではどうですか。

【前中部会長】

多分データがどこかにあると思うのですけれども。

【土井企画グループ長】

ちょっと、率までは出ていませんね。数は出ているのですが。

【前中部会長】

後ほど、それも踏まえてということで、更に議論するということで結構ですので。いかがでしょうか。

【大北委員】

すいません。5ページののところの中で、「認知件数」という言葉が出てくるのですが、私も意味がよく理解出来ないところもあるのですけれども、この辺は事務局、河内長野市は確かに、以前は、警察自身も言っているのですが、他市と比べますと犯罪件数が少ないという部分にあるという話を伺っているのですけれども、最近、我々が伺っ

ている中では、交通事故もそうなのですけれども、事件が頻繁に、我々が思うには、自分の市は、他市の状況はわかりませんが、自分の身近なところの中での話で、例えば、かなり犯罪件数も増えてきているという傾向にあるなという、感覚的な部分もありますけれども。この「認知件数」と出ていますね。この意味をちょっと教えてほしいのですが。

【土井企画グループ長】

ちょっと今、こちらではわからないのですが。ただ、「認知」ということは、警察が認知しているかどうかということですので、我々が、犯罪になるかならないかという基準とはちょっと違うと思うのです。ですから、専門的な統計上の数字なのかどうかをちょっと見てみないと。

【農野副部長】

あるのでしょうか、検挙件数とか。

【宮本委員】

上の「犯罪発生率」というのは、「認知件数」の発生件数と同じことなのですかね。ちょっとそのこともありますよね。

【前中部会長】

そうですね。

【大北委員】

ちょっとこれは市民にわかるように。市民の皆さんが、完成したものを読まれるわけですから。やはり認識をしていただかなければいけない部分もありますので。

【前中部会長】

特にこういうことについては、きちんとした論拠を示しておかないと。バックデータが必要ですね。

【大北委員】

ですから、もし、この言葉自体が専門用語、警察用語だという言い方であるならば、その説明書きを入れておいていただければなと思いますね。

【森尾委員】

今のところなのですけれども、災害に対しての備えが課題になっていますということ

で表されていると思うのですけれども、具体的に防災対策というものを、市民にこの辺で知らせる必要があるのではないかと思います。というのは、今、私たちの住んでいるところは、災害が起きればどこに避難するとか、どういうシステムで物が配布されるのか、そういうことが全然分かっていないということがありますので、この辺で改めて、そういうきちとした、この地区はここここが防災の場所であって、ここから物が配布されるのか、そういうことをきちっと分からせてあげることが大事ではないかということにが、気がつきました。

それから、ボランティア活動とか生涯学習のことなのですけれども、ボランティアに参加したいという人は沢山おられます。しかし、ボランティア活動にどういう組織があって、どこにどう言っていけば参加出来るのか、分からなくて。推進しておられる方は沢山おられますが、お問い合わせ先がバラバラなのです。というのも、市にも何かあるみたいですし、社会福祉協議会でも、もちろん受け付けていますので、そういう一覧表というのでしょうか、そういうはっきりしたもの、皆さんにわかっていただけるような、活動のシステムを市民に知らせるといことが大事ではないかと思ます。

得てして、情報を一部の人しかわかっていないという面が、河内長野の特徴のような気がしますので、何でも一般公開するといことが大事だと思います。もちろん、広報というのは出ているのですけれども、聞いてみると、あまり読んでいる人がいないのです。皆が放るので、がっかりしているのですけれども。そういうところで、何か、皆さんに知っていただく方法というのを考えていただきたいと思ます。

それから、ついながら、私、この間、休みましたので、既に皆さんから出ている問題かもしれませんが、高齢者の生きがいの 1 つとして、シルバーボランティアというのがあります。これは全くのボランティアであって、ご自分の車で、ご自分の善意で、高齢者に配食サービスをしておられるグループがあるのです。そういう人に対しては、市は、「ご苦労さん」ぐらいで済ましておられるのですけれども、そういう方たちがおられるということを知って、もっと激励をするとか、こういうお年寄りの活動団体があるのですよということも、先ほどの情報を知らせるといところにも関連するのですけれど。わからせてあげると、元気なお年寄りには生き甲斐になるのではないかと、そう考えました。

【前中部会長】

ありがとうございます。今、言われたことは、第 1 章のところ、そういう背景や必然性があるというようなことを明確に書いとおくということと、それから、更には、次の章で、また具体的に、それを受けて、こういうような表現していくといことが必要でしょうね。

【梶田委員】

すいません。ちょっと、1 ページと、それから、6 ページに関連するのですが、1 ページの真ん中の方に、「選択と集中」と、あるのです。選択と集中を地域自身で行っていくことが求められていると。いわゆる協働なのだと思うのですが、何を「選択」して何を「集中」するのか、その辺が何かちょっと、モヤッとしているような感じなのです。それから、6 ページにも、同じのものがあるのです。「徹底した財政健全化の視点での『選択と集中』が不可欠」とあります。何を「選択」して何を「集中」するのですかと、聞きたくなりますけど、この辺はどうなのでしょう。

それと、1 ページの方は、「『選択と集中』を地域自身で行って」とありますが、「地域」というのは住民を指すのかどうか。

【前中部会長】

表現として。

【梶田委員】

はい、何かモヤッとするのですが、

【農野副部長】

今、おっしゃったところを見ますと、もう少し丁寧に書いた方がいいように思いました。

先ほど、森尾先生がおっしゃった、「知っていただく」ということに、少し関連があったのですが、「高度情報化社会の進展」というのが、7 ページにございますね。もししたら、この中に、住民、生活しておられる方が知っていないことによる不利益というものが、恐らく出てくるかもしれないということを思います。最近、市でつくっていただいている様々なものに、大阪あたりでは、例えば、ハングルで書いてあったり、英語で書いてあったりと、そういうものを見かけるのですが、知っていただく、そして、知らされていないことによって生活の不利益が生じるということがあると思うのです。

だから、この高度情報化社会が進展しているからこそ、インターネットを持っていないとか、そういう方が不利益を受けないように、知っていただく努力をする。誰がするか。行政がするか、あるいは、自治会がやるか、ボランティアがするか、NPOがするか。そういう、どのように表現したらいいのか、ちょっとわからないのですが、知っていただく努力を、高度情報化社会の進展の中で、1 つ、項目を起こして書く必要があるかなと、今、森尾先生のお話を伺って、非常に、そういうことがあるなと思ったのですが。

【岡林委員】

すいません。それは私も思っていたのですが、今までの私でしたら、広報もさっとしか読ませていただいています。この機会を得まして、色々と気になりまして、

あれを読んだりこれを読んだりということをして初めて、「ああ、このようなこともしてくれているのだ」ということが、「こんなこともあったのだ」ということが、本当に恥ずかしいことなのですけれども、実際にいっぱいありました。それで、森尾先生がおっしゃったように、これを市民の皆さんに、「市がこうしているよ」「ああいうことをしている」ということが伝わる方法が重要だと思っていました、私自身も。

【前中部会長】

ありがとうございます。情報化が進むと同時に、それに対する対応みたいなものが、当然必要になってくると。

【岡林委員】

はい。

【前中部会長】

それに乗っかっていく部分はもちろんあるのですけれども、それだけでは。

【岡林委員】

一方的ではなくて、何かいい方法があればと思いました。

【前中部会長】

特に、先ほどのような、「地域自身で」ということがちゃんと伝わっていくという形をつくっておかないと。あと、こういう地域の情報をとるために、いちいち東京とかどこかにある、そういうプロバイダーに行かないとわからないということではなくてですね。

【大北委員】

7ページの上から3行目のところから、「町内会の加入率」。町内会の加入率が高まれば高まるほど、地域間交流というのもやりやすくなっていく部分があるのですが、最近は、単一町会すら入るのを断られる。また、町会が出来たとしても、連合町会には加わらない。また、その上の校区全体の連合町会にも加わらないとかいうところが増えてきつつあるのです。現に長野小学校校区の連合自治会で入らないということもあるわけですが、そういう部分で見ますと、先ほどの情報を、まあ、高齢化の話がこの前に出ていましたけれども、高齢化が進めば進むほど、自前でこういうインターネットに加入して、契約してパソコンからデータを見るということに馴染んでいる方でしたら、そのままされるのですが、なかなか馴染むのに時間がかかるというのが現実の問題としまして。だから、そういう意味で言いましたら、「高度情報化の進展」、これはこれで進めていかなければいけない部分はあるのですけれども、そういう人達のため

の、救済と言うとちょっと言葉が悪いのですけれども、そういう人達への情報の共有というのですか、公開というのですか、という方法も、一方では、平行して考えていかなければならないという部分も、この中には具体的に明記していかなければいけないのではないかなど。「わしらのためのことは何も無いかな」という思いになってはいけないと思いますので。

【宮本委員】

媒体はどんどん進化していくものですので、固定的に捉える必要は何もないと思うのです。そのときそのときで変わっていきますし、10年前に今のような状況など、誰も想像しなかった状況でありますし。やはり、絶えず、どういう形になろうとも、その中で情報を共有していく努力を怠ってはいけないという内容が必要なのかもしれません。

【梶田委員】

関連しまして、「電子市役所に向けた取り組み」と、こうなっていますよね。現在は、ITの関係で役所はどうなっているのかということになりますと、私どもの団体、老人クラブの連合会では、一昨年、どうしても必要だからということで、パソコン2台を買ったのです。「OK」をもらうのに、1年かかっています。それが今度は、電話がないでしょ、専用の。そうすると、社会福祉協議会の電話でインターネットをするか、あるいは、役所のどこかの部門で電話をつないでもらうかということになるのですけれども、それがどこも受け手がないのです。そうすると、今は文書作成などで使ったりしていますけれども、これから先、電子市役所になっていただければ、そういう分野をつくっていただいて、部屋でも与えてもらって、そこで接続出来るようにということが必要になってくるのではないかと思うのです。だから、表現はいいのですけれども、本当にそれが出来るかどうかクエスチョンなのです。よその老人クラブでしたら、ちゃんとインターネットを用意して、自分たちで情報を集めて、発信したり受けたりしていますのでね。それをやらなかったら遅れるわけです。いつも郵便で出しているわけです。そういうことがありますので、これはありがたいことを書いていただいているとは思いますが、今度また、財政上、頭を痛めていただかなくてはならないのではないかなという気がします。だから、今、おっしゃるように、これから必要な分野ですから、もう少し充実した言葉を入れてもらってと思いますが、いかがでしょうか。

【前中部会長】

いかがでしょうか。あと、7ページの「3.」のところに、人口に関わってくる事柄で、人口は色々、なかなか表現が難しい部分があって、どう表現するかなのですけれども、上から3つ目の点で、「人口減少・少子高齢化の進展は、その原動力が失われつつあることを意味します」という表現が、この計画が目指すものと少し矛盾があるので、例えば、

「原動力が失われ」ということは、過去の価値観からするとそうなのだけれども、新しい見方からすると、「人口の減少・少子高齢化は、総合計画における考え方の変質みたいなものをもたらしつつある」とか、何か、そういう表現がうまく出来ないかなという感じが少しするのです。「原動力が失われ」てしまっているとってしまおうと、「そしたら、人口をなんぼにすんの」という話になってしまいますので。

【農野副部長】

「右肩上がり」にもつながっているところですね。

【前中部会長】

ただ、過去はそうであったけれども、それが、転換が要求されているという、そういう表現かなと。

【高橋委員】

すいません、よろしいですか。先ほど申し上げました、1ページの真ん中あたりの「右肩上がり」ですね、これと、6ページの下の方、「しかし、1990年代からの長引く景気の低迷」とか、こういうところの整合ですね。「右肩上がり」などの抽象的な言葉でなくて、こういう言葉を入れた方がいいのではないのでしょうか。少なくとも、整合性はないですよ。1ページの「右肩上がり」と「90年代からの長引く景気の低迷」とは、言葉に整合性がないような気がします。

それから、先ほど、梶田委員が言われた、1ページの真ん中の「選択と集中」を地域自身で云々ということなのですから、これも、私もちょっとよくわからないのです。ですから、「選択と集中」という言葉は沢山出てきているのですけれども、例えば、先ほどもおっしゃった、6ページの下の方に、「財政健全化の視点での『選択と集中』」となっていますけれども、私は、「財政健全化」という言葉も、これもまた、抽象的な言葉ですから、やはり、市の基本計画なのですから、「市民のニーズを反映した選択と集中」とか、そのような言葉の方が、私は適切だと思います。

【前中部会長】

ありがとうございます。ともすれば、世間一般で言われている言葉をパッと持ってきてしまうというところがあるのですが、そうではなくて、河内長野の現状を踏まえて、それを具体的に表現をしておくということが必要なのだらうと思います。

それでは、時間が大分参りましたので、第2章の方に進めたいと思います。第2章の、「まちづくりの目標」という部分でいかがでしょうか。

【高橋委員】

すいません、ちょっと、事務局の方にお聞きしたいのですが、人口の推計ですけども、これは国の統計を使っておられるのでしょうか。出典を、別に今でなくてもいいので、教えていただきたい。人口の推計ですね。11万とか12万とか、色々出てきていますけれども、この根拠は、国の統計を使われているのか、それとも、何か独自に調査されたのか。今でもなくても結構ですから。

【前中部会長】

前にいただいている資料に載っているかと思うのですが、市独自の。

【土井企画グループ長】

『都道府県の将来推計人口 - 平成14年1月分』(国立社会保障人口問題研究所)、要するに、総務省の資料の分と、私どもの独自のルートで加味して作成しました。

【高橋委員】

ベースは国立社会保障人口問題研究所で、それを市の方で加味されたということですね。わかりました。

【谷村委員】

部会長さんが先ほどおっしゃった少子高齢化で、ちょっと考えてみたら、高齢化というのは上がないですね。100歳以上は100何歳とか。ところが、少子というのは大体、統計を取られているのは、0歳から14歳で、それは、15歳になると違う分野になる。片方の高齢化というと、いくらでもある。だから、少子高齢化と、1つにくっつけていいものかどうかと、今、そう感じたのですけれども。その根拠がね、同じような%なら、絶対に高齢が増えるのは当たり前で、元気です。だから、少子化と別の問題と捉えるべきかなと。

【前中部会長】

別のことですね。逆に言うと、高齢化するの、皆が長く生きられるようになったという、そのことの反映で、それ自体はある意味でいいことなのです。それを消極的に、人口が逆転するというようなこともあるのだけれども、活発に活動出来る、皆がいきいきと暮らしていけるという意味では、非常にいいことなのです、高齢化というのは。

【農野副部会長】

今、谷村委員がおっしゃったことは、非常に面白い視点だと思います。今、厚生労働省が次世代育成支援対策推進法をつくって、文部科学省も若者自立調整プランというプランを立てています。確かに、数としては少ないのですけれども、15歳で働いている子

ども達もいれば、30歳近くなっても子どものような人もいるという、そういう時代の中で、「少子」「子ども」をどこで区切るのかは、非常に難しいことなのですね。0歳には0歳なりの社会的な役割があって、おじいちゃん、おばあちゃんを喜ばせておられる。おじいちゃん、おばあちゃんの財布の紐を開けておられるということですね。100歳は100歳で、高齢者施設の中で、100歳のお年寄りがこれだけおられる。「まだまだ私も若いな」と考える80歳代後半の方達。それぞれの役割があって、その中で、少子高齢化と言ってしまうのは、考えてみれば、非常に乱暴な意見だなとつくづく今、お話を伺って思いました。非常に面白いご意見でした。

【梶田委員】

私どもが関連するのですけれども、高齢化といいますと、お年寄りとなりますね。今、全国的に、厚生労働省も、健康なお年寄り、健康づくりを増進しましょうということで、2年ほど前に、4億2500万円ぐらいの予算を組んだのです。ところが、その払いは、国が10万円、府が10万円、市が10万円と。その事業をやりたいということで、今考えられているのは、シニアスポーツでスカイクロス、今まではゲートボールやグラウンドゴルフ、あるいは、ウォーキングとあったわけです。とにかくそれはなぜかということ、介護を予防するのだと。元気な人が増えれば増えるほど、介護に厄介になる人が少なくなる。ということは、高齢社会も非常に元気に活発になってくるのではないということなのです。そういうことから、予算を、国、府、市が出すということになった。ところが、府や市で予算を組んでいなかったら出てこないのです。結局、持ち腐れということになってしまうのです。ですから、今、先ほどからおっしゃったように、高齢化は、何もすぐに介護になるのだとか、そういう弱いお年寄りにするのではなくて、もっと健康増進して、元気なお年寄りを沢山つくってくださいという社会を実現したいという意味合いを何か込めていただいたら、ありがたいなという気がするのです。

【農野副部長】

「元気なまちづくり」の10ページののところで、人口減少や少子高齢化の中で、まちの活性化につながるまちづくりが必要と。こういう辺りの次ぐらいに、年齢という捉え方ではなく、それぞれの世代の人達がいきいきと役割を果たせるみたいな、そういうものがちょっと必要かなと思います。年齢にこだわるのではなくて。

【梶田委員】

何か、人口減少と高齢化が頭にポンと来るから、難しく考えなければいけないですね。

【大北委員】

このまちづくりという部分の中で考えていく中で、高齢化の問題が今出ているのですけれども、色々なお話を伺っている中で、今の若い人たちの平均寿命という言い方をされていたのですけれども、今は70歳代、80歳代と、男女、になりますけれども、若い世代の人たちの平均寿命というのは、50歳代になるであろうという予測も一方であります。それはどこから来ているのかというと、ファストフード、要するに、アメリカナイズ的な形でのファストフードが好まれてきている、栄養が偏るとか、こういう部分の中で、言われています。その対策という部分では、「食育」という言葉が、最近よく言われるようになりました。先ほどの、年齢の関係がなしという部分はあるのですが、そういう部分を入れていただくことも必要かなと、ちょっと思ったのです。だから、50歳代で高齢だと、このような話になる時代が来ってしまうという話を予測されている栄養士さんもおられますので。とても困った話であると思っていたわけですが、そういう部分というのが、あまり表に出てきていないというのが、今の状況だと思うのです。だから、教育委員会でも小学生の給食だけではなく、家庭内の「食育」という部分が、最近やかましく言うようになってきていますので、その辺のところも、しっかりとこの中にうたって、ご検討いただけたらと思うのですけれども。

【水谷委員】

先ほどからの、少子高齢化の中なのですから、少子という問題で、生まれてくる子どもが少ないという、1人の女性が一生の間の出産が1.29という数字が出たときに、非常な驚きが出て、単純計算としましても、2以下だと、どんどん人口は減少していくというのがあります。なぜ産まないか、産めないかという問題に対して、今、様々なところで論議が行われていると思いますし、この河内長野でも、色々な場でそういう話が出てきて、私は、先日申しました、男女共同参画の実行委員をしているのですが、その中でも、こういう話は出てきます。その中で、やはり、安心して子育てができる、そういう地域づくりということが、今、このまちづくりの理念の中でも、少し、その部分が足りないのではないかと感じています。11ページの上の点のところぐらいしか、子どもに関すること、あるいは、子育ての部分が見当たらないというのが、ちょっと残念な気がいたします。やはり、ここで安心して子どもを育てられる、あるいは、ここで産むことができる、そういった保障というものを、きちんとここで打ち出していただけないだろうかと思います。

【前中部会長】

それは非常に大切なことで、もっと前のところで、何かそういうところを表現して。

【農野副部長】

その辺が難しいところで、あまりそういうことがバンと出てくると、また、人口規模

を目標にしているのではないかみたいなところになるわけなのですね。

【高橋委員】

すいません。先ほど、大田委員が言われた章立てで、人口とか都市構造とかいうものを目標から外したということですね。人口というのはむしろ、結果ですから。そういう発想ですよ。そういう理解でいいのですよね。それは私もよくわかるのですけれども、むしろ、この3ページの一番上の方に、「12万人都市にふさわしい市民サービスの充実をはかってきた」とあり、その下の方に「12万市民が暮らせる基本的な都市基盤はほど整っていると言えます」となっているわけです。では、12万人規模だったら、もういいのかな、ほぼ何もすることはないのではないかと、ちょっと語弊があるかもしれませんが。というような、私はむしろ、そちらの方がちょっと引っかけたのですけれども。あと、それを踏まえて、8ページの「人口は11万人前後になると推計され」、目標が12万人だということになっているので、12万人を想定するということなのでしょうけれども、その目標はもうクリアされているのではないかと読み取れるわけです。形式的な話ですけれども、ちょっとその辺が気になったところですが、むしろ、人口を目標から外した方がいいことだと思うのですけれども、結果ですからね。

【水谷委員】

先ほど、人口に関わると私が申しました、安心して産めるということが、決してそれだけではないと思います。と申しますのは、「安心安全のまちづくり」という部分で、子ども達自身が安心して安全に暮らしていけるというのは、やはり、先ほど言いました、安心して産める、安心して育てられるというのは、決して切り離すものではなく、様々な、社会的に色々な、子どもに対する虐待の問題であるとか、そういうところの解決にもつながっていくと思うのです。安心して子育てができるという、決して人口増加につながっていくというわけではなくて、中身の充実であるという、その辺がちょっと。

【前中部会長】

人口をどう設定するかということとは全く無関係に、皆が安心して子供を産み、安心して育てられるというのは、数の設定とは全く別の問題で、もっと基本的な問題なのですよ、基本的には。

【農野副部長】

すいません、ちょっとよろしいでしょうか。10ページの「まちづくりの理念」のところで、下から3つ目の点で、「多様な形での『共生』が求められている」という中で、「異なる価値観や生き方を持った人々、男と女、外国人と日本人、障害者と健常者」と書いてあるのですが、もしかしたら、今、水谷委員がおっしゃったように、「大人と子ども」

というのも、これは書きこんでいいのかわからないのですけれども、「高齢者と現役世代」というのも非常に大きな共生なのかなと。現役世代の負担、世代間の公平負担のあり方だとか、そういう社会保障の部分でも議論されていますよね。そこまで書き込んでいいのかわかちょっと悩みますが、現実には高齢者と現役世代という、そういう課題もあるかと思うのですけれども。

【前中部会長】

「大人と子ども」というのと、それから、後の方は「世代間」ということであれば、少し表現が、逆に言うと、弱くはなってしまう面もあるのですけれども、「世代間」ということで。

いかがでしょうか。都市の将来像というので、仮案として「みんなで創る 緑とうるおいの安全・安心・元気都市 河内長野」というようなものがあります。こういうのは大切な言葉になってきますので。

【宮本委員】

これはどういうことを意図しているのでしょうか。1つの標語みたいなものをつくろうということですか。

【前中部会長】

標語みたいな、そうですね。

【宮本委員】

最終的に、何か1つにまとめようということですね。

【前中部会長】

はい、そうです。

【高橋委員】

すいません。最後に、人口のことにこだわりますけれども、7ページで、国全体の人口が減ってくるので、河内長野市だけが增加させることは現実的ではないという表現がありますよね。それから、8ページのところで、上の方で、「人口の『規模』は小さくなくても」云々という表現があります。それから、10ページのところで、「人口減少という時代の潮流に敢えて逆らわず」となっていますけれども、あまり、「人口減少したっていいんじゃないか」というニュアンスに受け取られてしまいますので、あまり、「地域資源の循環」ということを書かれているのですよね。ですから、これは多分、産業の育成とか、そういうことも、当然含まれるはずですから、あまり、「人口が減っても国全体が減って

いるからいいのではないかと、ちょっとそういう風にも受け取れる。実際、最近新聞で読んだのですけれども、大阪市とか堺市では人口が増えているのですよね、8,000人とか。ですから、その辺は努力すれば、先ほどの人口社会問題研究所の推計でも、その辺の前提が変われば、また変わってくるはずなのです。フローチャートがインターネットなどにも載っていますけれども、ご覧いただければわかりますけれども。ですから、10年先を読んだ計画ですから、ことさら強調することはないのではないかと思いますけれども。以上です。

【前中部会長】

2章まで、大体ご意見をいただいたと思いますが、あと、3章ですが、これは今後もまた、検討ということになります。もし、3章について、今の段階で何かご意見がございましたら、「目標達成のための重点施策と計画推進の仕組み」と、先ほどから色々あったような、具体的なことにつながるようなことを、この部分でしっかり書いておく必要があるように思います。

よろしいでしょうか。それでは、一応予定しておりました時間になりましたので、今回の討議を終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

それでは、次回の部会の日程について、事務局より、お願いいたします。

(日程調整のやり取り)

それでは11日の10時からということにしたいと思います。場所については、確定していただいて、ご連絡をお願いしたいと思います。

本日予定されておりました案件については、以上で討議を終了いたしました。これをもって、第4回河内長野市総合計画審議会の私たちの部会の審議を終了させていただきます。長時間にわたり、ご協力ありがとうございました。